

[ドリームキャッチャー]

障害者は誰が作るのか？

岡野 善紀

楽しく充実した日々を送りたい！ 私は特に意識していないが、いつも充実した日々を送れるよう行動している。ただ、車イスは目立つようで、社会で生活しているとネガティブに「障害者」を実感することがある。私はこうした経験を踏まえて、障害を意識しない環境を作り出せないのだろうかと思うことがある。

「障害者」を実感する一つは、人からの視線である。車イスの生活をしているとよく周囲からの視線を感じる。脊髄損傷し車イスを使い始めた時は、自意識が過剰なために周囲の視線が気になる、だから自分が見られていると考えていた時もあった。しかし現在でも多く視線を感じている。

子どもは正直で、気になるものをまっすぐ集中して見る。近くに親がいる場合には「あれ何？ 何で乗っているの？」と自分を見ながら質問をしているのを聞くと、自分が「障害者」と強く実感することがあった。自分が買い物に行く場合でも、車イス乗りを見かけるとつい見てしまう。目立つのだから見てしまうのはしょうがない。では周囲の人が見ないようにすれば「障害者」を意識しなくて済むのか？

では仮に、周囲の人が「見ない」ように努力したとしよう。これも見ないようにされていると雰囲気を感じ、もっとネガティブに捉えた場合「避けられている」と車イス乗りは感じるかもしれない。ではどのようにしたら車イス乗りは障害者として目立たないようにできるのか。

一つの回答は、普段から外に出ている車イス乗りを、いろいろな人々が見慣れることである。いつも見ていれば珍しくもない。このような状況を私はスウェーデンで実感している。例えば、大通りに面したオープンカフェでビールを飲んでいたり。日本では行く人来る人、大勢からいろいろな視線を浴びる。スウェーデンでは車イス乗りがお酒を飲んでいるくらいでは見ることもしない。それは当たり前風景だからだ。

他者の視点以外に「障害者」を感じる時はどのような時があるだろうか。私の場合は、自分を見た目で過小評価された時である。当然できることでも車イスに乗っていることで、過剰な介護を受ける、また行動を制限されることが良くある。これには多大なストレスを感じる。

例えば、市役所に行った時のこと、申請書を作成しようとしている時に「書けますか？ 説明しますか？」と言われたことがある。自分としては理解しているし、作成できるのに過剰な配慮で子ども扱いされているように感じてしまう。しかしながら、係りの方も何かできないかと考えて行動されたのだと思っている。ここでは「特別扱い」が障害者を感じさせる要因かも知れない。

数年前に愛知万博に行ったのだが、ここでも「特別扱い」を多く受けることになる。多くの施設が階段を使用しており、別に車イス使用者用の入り口を設けている。私が入場する際には、一般客と違う入り口から入る。施設を作る時点で健常者を中心に作られ、障害者に「配慮」という形でバリアフリーにされている。私はいつもこの考え方に違和感を覚える。なぜ、様々な人が一緒に使える施設を考えないのだろうか。北欧館は特別扱いをしていない。特別な入り口もなくスムーズに移動出来る。デザインは個人の感性によるものが大きい。私はデザイン性も犠牲にしていないと思う。特別扱いをしないことが「障害者」を意識させないことに繋がるのではないだろうか。

さて、先程から北欧やスウェーデンを例に挙げている。特にスウェーデンは福祉国家として有名である。この福祉国家のスウェーデンは、バリアフリーで車イス乗りには生活しやすい国と思われている人が、多くいるのではないだろうか。

首都はストックホルムであるが、実はバリアフリーでない場所が多くある。階段や石畳の道路で、夢のバリアフリーの国とはほど遠い印象だ。実は日本の首都圏のほうが、ハード面では進んでいるのではと、思うくらいである。しかし不思議と、日本で生活しているより「障害者」を自分で意識する機会がない。

例えば、スウェーデンではバスに気軽に乗ることができる。日本では、スロープ付の路線バスに乗ろうとしても運転手が、扱い方が分からない、また時間がかかることで他の乗客より迷惑がられるなど多くの経験をしている。スウェーデンでは、一人で乗り込むことができるバスも運用されている。また、とても乗り込めそうにない階段付きのバスでも、乗客や乗務員と一緒に、乗り込む為の課題を解決してくれる。これは1度や2度ではなかった。これは文化の違いだと興味を沸き、現地の人に理由を尋ねた。

車イス乗りが、階段で困っているとしよう。この問題について捉え方が違うようだ。日本では問題の責任が個人に求められることが多いように感じる。例えば、「あの人は車イスで階段が使えないのか、かわいそうに」とか「階段のあるところに来ないように調べておけばいいのに」と聞くことがある。スウェーデンでは、課題は個人に帰せずに社会の問題として捉える。階段は健常者の利用を中心に使用されている。だから車イス乗りが階段で困っている時、それは車イス乗りの問題ではなく社会の問題であり、だから周囲の人々が一緒に解決するのだという。

私はまだまだ日本では「障害者」にはお世話をする、「障害者」は介助を受ける文化が根強いと感じる。スウェーデンではそれを感じない。気持ちの上でのバリアフリーで、障害者意識することがなかった。スウェーデンでは多くの障害者が社会参加し、各々の力を発揮して国を支える努力をしてきたからだろう。

一つ面白い話がある。バスに乗る時に車イス乗りは普通に料金を払うのだが、実は無料の人がいる。赤ちゃん連れの親である。理由を聞くと、赤ちゃんを持つ家族には、経済的また生活面での援助が社会的に必要なだが、障害者は障害を持ってはいるが、働けるので減額する必要がないという。私はそれから料金を払えることを嬉しく思った。



さて、私は両下肢麻痺で車イスを利用しているのだが、時々車イスだけは乗りたくないと思願している人を見かける。その時に私はいつも、使える道具は積極的に使えば生活が良くなるのと感じている。足が使えなければ、車イスを使用することで飛躍的に行動の範囲を広げることができる。車イスを使用できることで、仕事でも出張に行くこともでき、スキーや趣味の活動もできる。人間には道具を使う特権があるのだと思う。健常者でも、道具を使わない生活は現在では考える事ができない。自分に合った道具を「自分」で選び、社会に積極的に参加して生活を送ることが、楽しく充実した日々を送るコツの一つだと考えている。

だから、車イス使用者＝障害者＝できない人、と考えている人がいると、とても悲しい気分になる。私は神奈川県に在住していて、東京・神奈川が生活圏内だが、外に出かけてもあまり車イス乗りは見かけることができない。外に出かける車イス乗り、特に公共交通機関を使用する車イス乗りが少ないのだろう。ストックホルムでは東京に比べると、車イス乗りを見かける機会が圧倒的に多い。ストックホルムのあちこちで、毎日、複数の車イス乗りを見かけた。

外にでる車イス乗りが増えれば、日本の社会にも、もっと車イスで生活しやすい環境が出来上がると思う。しかし現在は、車イス乗りにとって外に出にくい環境であることも確かだ。私は、より多くの車イス乗りが社会参加し、車イス乗りが「特別な存在」でなくなるように努力したいと考えている。

車イスで外に出かけることは以外と難しくはない。車イスの操作技術も蓄積されて来ていて、多くの人が操作技術を身につけられるようになってきた。車イスや道具も発達して

いる。例えば、簡易手動運転装置を使えば、電車・飛行機で移動し、レンタカーでの移動もできる。

仕事の環境も変わってきているのではないか。私は現在、企業に所属し、人事で教育を担当している。主なミッションの一つとして新入社員教育がある。この環境では、私が新人にスキルアップのために支援することがあっても、私が支援されることはほとんどない。仕事をする環境では、障害を気にすることはほとんどなく、そこにある課題に取り組んでいる。そこには、ネガティブな意味での「障害者」を意識する必要がない。

結局のところ、「障害者」は障害を持つ本人と、周囲の人の認識で作られていると思う。その障害を強く意識し、障害に固執することで、ネガティブな「障害者」の認識が作られるのではないか。私は健常者に近づくことが、障害の克服とは全く考えていない。今ある現状を正確に把握し、自分のしたいことを実現すること、社会に支えられ、いかに支えるかを考えることが「人」として重要だと考えている。

「人」としてよりよく生きるには、「課題」の捉え方が大切だと思う。人は「課題」を持って生活していると思う。障害を持つ人の多くは、周囲から「課題」が分かりやすいために「特別扱い」を受けるのかもしれない。

私が提案したいのは、人それぞれが持つ課題を、個人のできる範囲で共有し、解決できる風土を作ることである。私は、そうした風土の基で、より多くの人々が個性を持ち、楽しく、充実した日々を送れるのでは考えている。

（おかの よしのり）